

定年俳句誌

8 2012年
月 号

かたね

ふ



黒羽集

(八)

佐藤喜仙

八重桜雨にまぎれて散りてをり

咲き残る枝垂れの花の雨雫

春雨や探しあてたる小菊橋

駅で買ふ百円の傘走り梅雨



駅を出て古き市場に鮮魚売る

日本の雨に凜とし花ミズキ

春の雨烏野豌豆もじやもじやと

上水は暗渠とされて花は葉に

郁子の花車庫の屋根より下がりをり

小菊橋暗渠のうえの藪椿

かせね集

白選句集



「梅雨入り」

松本周二

タンカーの一つのほかは梅雨の海

蚊の声の耳そばに来て目覚めたる

蜘蛛の巣を払ひてパントマイムめく

草笛の音つきぬける古城かな

ひきがへる語れば長き素性かな

県境を越ゆるも匂ふ花蜜柑

「浜大根」

古川千鶴

「梅雨空」

安藤虎醉

磯畑に貝殻の垣浜大根

人柱たてしは昔雪解川

梅雨近し一艘もなき能登の海

弓なりに見る天井絵夏帽子

舟遊び運河をめぐるセレナーデ

柳絮舞ふユーロの国の国境を

「新茶」

川井素山

「夏」

菅原 孟

加茂川の川床の灯や京舞妓

雲海をぬけて出雲や蕨の波

ざぶざぶと海へ傾く神輿かな

遊覧船異国語とびかふ夏休

借景や古民家の縁瓜を食む

新茶汲む一人に余る急須かな

手塩かけ咲きし牡丹や陽は柔く

伝統の繭作りにも影さしぬ

園丁の腕を競ひし大牡丹

桑の葉を音たてて食ふ蚕かな

梅雨空を見上げて決める傘持参

雨あとの色鮮やかに花菖蒲

夏なれど襟裳岬の寒さかな

噴水や空に噴き上げ雲となる

三原山砂漠を渡る夏帽子

蝉落つる声の抜け殻腹空ろ

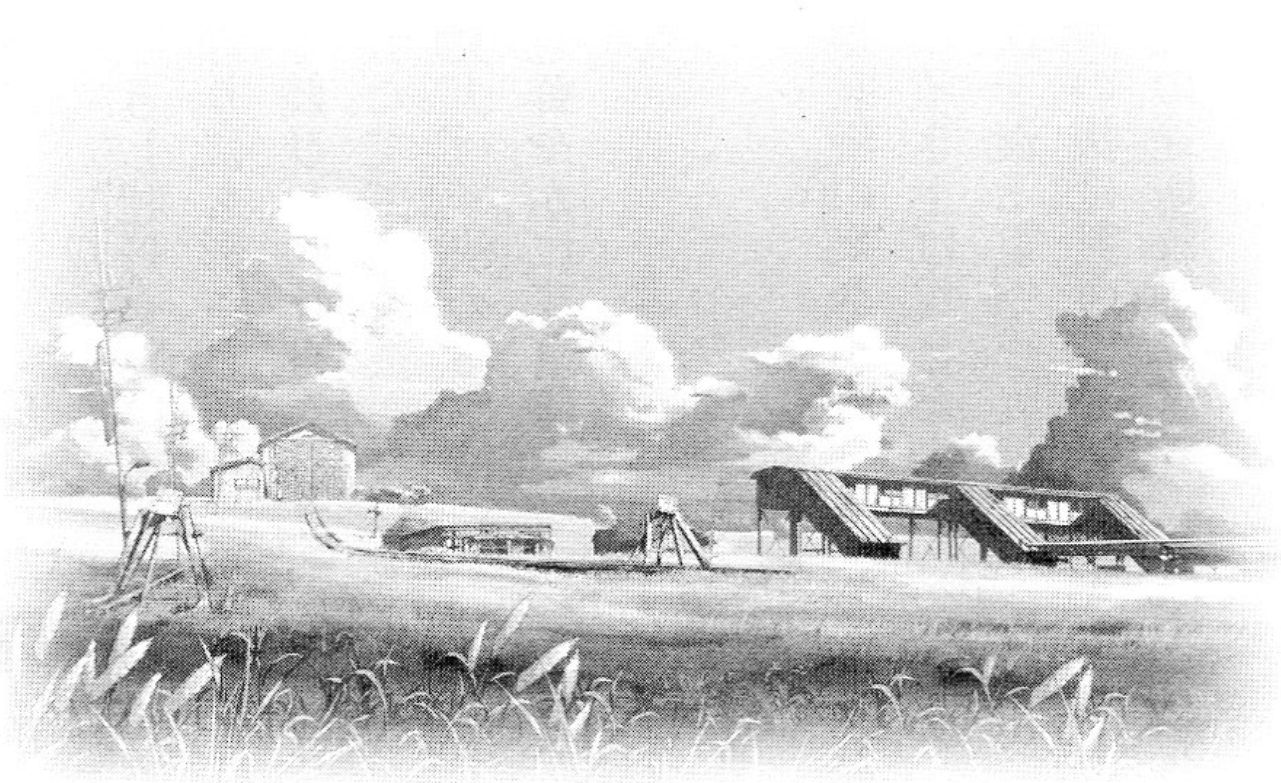
僧が読む経の途切れる青嵐

寝しなの香月下美人に起さるる

「青梅」

木島茶筥子

青梅や餓えし学童疎開の日
盆提灯購ふこともなくて来し
己の死たまさか思ふ夕端居
奇数には一氣に切れぬ西瓜かな
母の日や喜寿になりても母を恋ふ
餓えし頃ありあり想ふ走馬灯



撫子集

主宰選



くれなるの紫陽花の帯線路沿ひ

本郷宗祥

蕊積り錆色の道若葉雨

鳥一羽水面走るや夏木立

雨上りそぞろ歩きの木下闇

ベゴニアは大輪となり薔薇のごと

土の香の深まる小径走り梅雨

米田文彦

時折りは鳥の声聞く木下闇

薔薇園は幾何学模様雨止まず

青桐に寄りて居眠る荷物番

尺蠖を見てそのままに散歩道

たらちねの母わが胸に仏生会
庭園の松の名木緑立つ

小林美登里

紫の襖のごとしエリカ垣

田や畑に鍬の光りて山笑ふ

春潮の磯に残さるる潮だまり

鉄線花の花弁の濡れて朝明ける

岡野安雅

漁火のまばたく光り海に映え

嵐山の流れゆつたり船遊び

学会に参加と書いて迎へ梅雨

峰と峰千の緑で手をつなぎ

早ばやと客の起きだす鮎の宿

小池清司

堰五尺光となりて鮎躍る

梅霖に利休鼠の暮色かな

逍遥や息深ぶかと青楓

父の日やそつと口癖真似てみる

鉛色の海が呑みこむ梅雨の空
妻をまち読書で過す梅雨の闇

山本達人

夏日浴ぶる野仏三体我慢くらべ

巨大雲光を呑んで虹を吐く

朝日の中卯の花盛かり小鳥鳴く

ウグイスの鳴き声響く散歩道

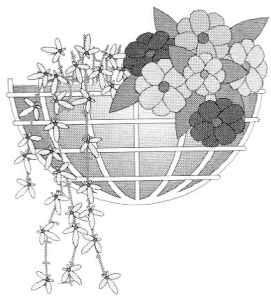
田島昭人

日射し浴び新緑森を深くして

零れ種軒下に咲く金魚草

水無月は紫陽花により輝やけり

梅雨晴間長く続かぬ予報かな



那須野集

主宰選



いつの間に我が背を超せり立葵

青木英林

裏磐梯の池の瑠璃五月雨

郡山真帆

酒米の棚田の里に初蛩

熊野路の麓の宿坊月涼し

浮世絵の美人のごとき花菖蒲

学生がギター持ち出す木下闇

梅雨入りや古刹の庭に苔のむす

野の草に花光りをり初夏の朝

夏木立子供ら集ふ芝広場

カヌー滑る舳水切る山上湖

ほろ酔ひや銀座行き交ふ風鈴売

丸山酔宵子

お茶室の畳のにほひ更衣

吉田啓悟

来るを待つ舌舐め喉鳴るビールかな

一日のたそがれ時や夏落葉

夏の宵帰りそびれる暖簾かな

菖蒲田に孤高の黄花風にゆれ

朝露に濡れし薔薇の香仄かなり

糸の雨蛇の目さされて花菖蒲

雨に咲く紫陽花の彩それぞれに

書院の間昔の栄華思ふ夏

プラタナス若葉萌え出で雨に光る

坂上じゅん

山寺に時鳥啼く高蓼

池内とほる

老人は樹下のベンチに風薫る

白樺やどこまでつづくキャベツ畑

薫風や街行く顔の影深し

若楓木洩れ日受けて光りけり

梅雨晴れて夾竹桃の乱れ咲く

石楠花の花房おもし雨上がり

晴天や溪薄暗き滝しぶき

風に舞ひ陽に燦めくや滝しぶき

蜘蛛の囿の朝露含みきらめけり

橋本修平

菖蒲田に花影の薄き雨催ひ

松本信子

糸筋に丸まつて寝る小蜘蛛かな

若葉マークのやうな葉拾ふ夏山路

われ先に鳥逃げ惑ふ夕立かな

スケッチの途中筆置く夏の霧

紫陽花の艶のましけり雨匂ふ

若楓梢の先より雨雫

黒南風に大きく揺るる花擬宝珠

山梔子の花の白映ゆ雨上り

後藤克彦

梅雨霞この世とあの世の別れ道

長島清山

鳥啄み日に日に減れる熟し枇杷

湯の郷に光りを曳きてホタル舞ふ

故郷の魚ざんまい端午の宴

雨空や人の集まる菖蒲園

夏至の昼コンクリートも輝きて

桐の花スカイツリーの色に似て

色姿良しと畦に雨蛙

柳田皓一

築打ちて水の形相変はりけり

佐々木薫

雨蛙ちよこつと揺るる草の上

梅雨空や雨落ち始むるスカイツリー

荒庭や隅のどくだみ五つ六つ

遠き鐘雨雲晴れて合歡の花

場所は決め真菰刈り取るヘラ釣師
今は昔サマーキャンプのおさげ髪

深閑と木立の奥より滝の音

赤門に別れを告げる受験生

公園の緑を背に花菖蒲

吉田博行

竹林の主の掛け声筍打つ

松田利秋

花菖蒲水に溶けこむ花の色

紫陽花の色鮮やかや雨しづく

つゆ晴れの頂き赤し八ヶ岳

夏空に指輪のごとき金環食

薫風やすれちがふ子はみな美人

大正期の絢爛たる庭に君子蘭

柿若葉青春といふはこんな色

門涼み隣家の娘の藍浴衣

白南風や海はきらきら大漁旗

菊地崇之

日に射られ眠気を覚ます夏の朝

十薬の匂ひ馴染んで目の涼し

花菖蒲穢れぬ姿園に映え

里山に生氣あふるる青葉かな

伝言板

1 第八回本部句会 (原則第二金曜日)

①日時 2012年8月10日(金)

14:00～17:00

②場所 目黒区「下目黒住区センター」

3階会議室「別添地図参照」

③投句 当季雑詠 5句

④会費 10000円

2 第九回本部句会

①日時 2012年9月14日(金)

14:00～17:00

その他事項は第八回に同じ

3 吟行 (2012年度吟行方針)

毎月同じ場所を吟行し、日本の四季の微妙な変化を認識する。なお今年度は吟行後の句会は行わない。

①第八回吟行 (原則第四火曜日)

日時 2012年8月28日(火)

13:30～15:30位

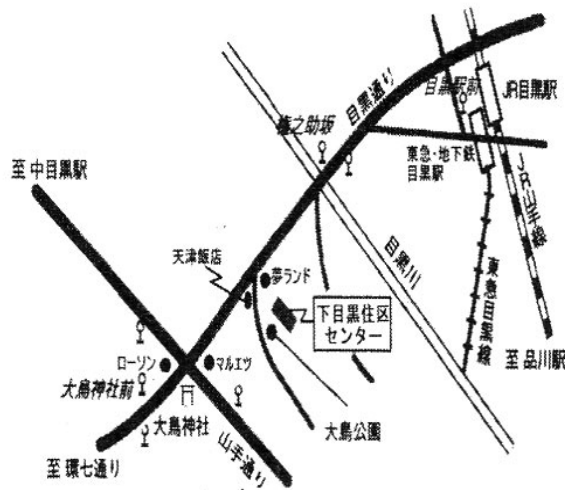
場所 新宿御苑
集合 新宿御苑正門前
入場料 各自負担 2000円

②第九回吟行

日時 2012年9月25日(火)

13:30～15:30位

その他事項は第八回に同じ



4 「かさね」友の会の皆さん
投句をされる時、裏面に「友の会の声」

欄がございますので、句評、近況報告、ご意見などご自由にお寄せください。なお友の会の皆さんは特別作品(十句)、随筆、その他論文等をいつでも投稿することができます。お待ちいたしております。

会員募集

何時からでも「かさねの友」になれます。

年会費 12000円(前納)

ただし年次途中入会者は入会申し出の翌月より12月まで月割りで納付

見本誌 四百円(切手可)

見本誌請求先

15210033

東京都目黒区大岡山2-7-5

かさね俳句会 佐藤喜仙

「かさね」俳句の基本

I 前提

- 一、俳句は世界最短の「詩」である。
- 二、有季・定型・文語体を旨とする。

① 「詩」とは

水原秋櫻子が俳誌「馬酔木」の昭和六年（一九三一年）十月号に載せた「自然の真と芸術上の真」より抜粋

「ただ自然の真だけを追求したところで詩人たる資格はない。心を養い、主観を通して見たものこそ文芸上の真で、これを尊ぶ人が詩人である」

② 有季の原則

原則①

「季語とは累々と先達が磨いてきた季節を表す言語群であり、歳時記により集大成されている」

原則②

「季語が一句の中で使われ、その句の季節を明確に表出する時、その季語を『表季語』と称する」

原則③

「一年を通して存在する現象、あるいは事物が季を定められている語彙の場合、その定められた以外の季節においてはその語彙は季語とは見做さない」

原則④

「季重なりとは同季に属する季語を一句の中で二語以上重ねて使用する場合をいう」

原則⑤

「例えば絵・版画・掛け軸・屏風・襖絵等に描かれた、通常季語と見做される花鳥等は、季感がないので季語とはみなさない。同様比喩に使われている通常は季語である語群もやはり季感が無きがゆえに、季語とはみなさない」

③

文語体について

俳句は韻文であることを守るため文語を使用し、用言においては歴史的仮名遣いを必ず使用することとする。

II

俳句の約束事

一、切れ字（十八字）を使い俳句にメリハリをつける。

現在切れ字とされている文字は、や、かな、けり、もがな、し、ぞ、か、よ、せ、れ、つ、ぬ、へ、す、いかに、じ、け、けん。

二、表現

主観を直接表現せず、具象表現を使うことにより、自分がその一句の中で言いたい主観を暗示の形で言い表す。

三、地名・固有名詞

地名・固有名詞は一句の中にあつて季語に次ぐ重要な働きをするが、一句の中で使用する時は少なくとも大方の俳人が知っているであろう地名・固有名詞にとどめる。

四、三段切

形は三段切でも言わんとする内容が繋がって居れば良しとする。

例 完全な三段切

奈良七重七堂伽藍八重桜 芭蕉
三段切でも可 初蝶来何色と問ふ黄と答ふ 虚子

五、前書・ルビ

前書は慶弔の句にのみゆるされる。
ルビは誌中では使用しない。

III

俳句の作り方……山口誓子

私の俳句の作り方を、図式で現せば、至極簡単である。感動が先立たねばならぬ。事物と出会って思わず「ああ」と叫ぶその叫びから、俳句は生まれるのである。